
サキュバスの楽園

ラン丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サキユバスの楽園

【Nコード】

N2123Q

【作者名】

ラン丸

【あらすじ】

黒羽連続婦女殺害事件。後にそう呼ばれる一連の惨劇の本当の真実は、犯人逮捕の後。一人の高校生の手で明かされることになる。

なぜ三人の女性は殺されたのか。

なぜ遺体は死後切り付けられるのか。

なぜ自首をした犯人は事件の詳細を語らないのか。

現代の色町を舞台に繰り広げられる推理物の長編連載小説。

事件の陰でサキュバスが笑う。

プロローグ（前書き）

サキュバスの楽園を閲覧してくださる皆様。いや、ご主人様たちへ前書きです。

といつても、プロローグなので特に書くことがないや・・・。

低クオリティでごめんなさい。まだまだ未熟者ですのでアドバイス
を大募集です。

プロローグ

「お兄さん。私の花を買いませんか？」

桜舞い散る、4月のことであつた・・・。

アパートの扉を開けてみると、そこにいたのは新聞勧誘のあんちゃんでもなければ、怪しげな宗教勧誘のおばさんでもなく真新しいブレザーに身を包んだ、ちんまりとした小娘だった。

整った顔立ちに加え、肌は白雪のように透き通っていた。若干頬が紅潮しているせいか妖艶な印象を受ける。

「お兄さん。聞いていますか？」

「あ、はい。」

少女が訝しげにこちらを見据えていた。しかし、よくよく考えてみれば訝しがるのはこちらのはずである。気弱な性格は、こんな小娘相手にも出てきてしまうものなのか。

「花を買ってほしいんですよ。お兄さん四谷産業の社員さんでしょう？アパートの入り口でちょっと小太りなオバサンが話してました。」

少女は明るい午後の日差しを背景に屈託なく微笑んだ。絵になる少女である。

私が答えられないでいると、少女は矢継ぎ早に続けた。

「四谷産業っていったらなかなか大手ですもんね。きつと高く買ってくれると思ったんです。それにお兄さんなかなか美形だし。だから

ら思い切って……。」

「いや、おい。ちょっと待ってくれ。」

さすがにこれ以上黙っているわけにはいかない。彼女が私に買わせようとしているものは、彼女の立場を考えるとあつてはならない商品なはずである。

「君。制服着てるってことは高校生でしょ。しかもその制服は北高のだろう。」

「へー。制服だけで学校名までわかるなんて。お兄さんこういうの好きなんですか？制服着てきてよかったです。」

少女は今にも小躍りを始めるのではないかというほどの笑顔を浮かべ喜んだ。

どうも話がかみ合わない。私がいいたいのとはそんなことではないのだ。

二三度頭をかきむしると、ふいに自分がジャージ姿だったことに気づく。すると無用な羞恥心がジワリと頭をもたげ始めた。いまさら恥も外聞もないだろうに。

私は羞恥心が完全に姿を現すまえにと、勢いにまかせ言い放った。

「き、君の言う花ってのはつまり……。あれだろう！」

不意に春のそよ風が吹き抜けた。小さな桜の一片がヒラヒラと舞い踊る。風にあわせるように少女はふわりとひとつ微笑み、そのつやのある声で囁いた。

「ええ、私の体のことです。お兄さん、私の春を買ってください。」

少女のシャンプーのさわやかな香りが私の鼻を撫ぜ、
いずこかへと
抜けていった。

プロローグ（後書き）

サキュバスの楽園を閲覧していただいた皆様。いや、お嬢様たちへ後書きです。

まだプロローグですが、目を通していただいて感謝感激雨霰です。本当にありがとうございました。

次回から本格的に物語がスタートします。といっても最初は説明調になってしまいかもしれません。申し訳ない。

推理物は初めての経験なのでうまく纏められるか不安ですが、この先も読み進めていただけるとありがたいです。

また、一言でいいので感想・アドバイスなどしていただけるとうれしいです。あ、いや。お忙しいのでしたらもちろん大丈夫です。その、読んでいただけただけで恐縮です。云々

第一話　　始まり

今からちょうど1週間前、隣のクラスの西川千鶴という女子生徒が何者かに殺害された。

『鋭利な刃物で右胸を一突きされたことによる失血死が直接的な死因で、体には死後つけられたと思われる無数の切り傷が発見されたことから、これまでの婦女連続殺人事件と同様の人物による犯行とみられます。』とテレビ画面の向こうにいるニュースキャスターが無機質に解説していた。

そのニュースを見たとき僕は酷く冷静で、そしてなぜだか少し胸が躍った。それはある意味殺人犯より冷静だ。と複雑な心境になりながらトーストを齧ったのを覚えている。学校では急遽全校集会が開かれ、普段滅多に顔を出さない校長が西川千鶴への弔いの言葉と生徒に注意を呼びかけていたが、僕には校長の言葉も無機質に聞こえた。

教室に戻ったあと担任から再度注意を受けたが、生徒たちは誰も聞いていなかったようだ。なぜなら生徒たちが抱いた感情は恐怖心でもなければ、哀れみでもなく。ただただ、好奇心だけだったのだろう。程なくして西川千鶴に対する暴言ともとれるような噂が流れ始めた。友人の柿崎由美曰く、『西川千鶴が交際していた男が浮気をして、口論のすえに殺された』だの『西川千鶴は援助交際をしていて、たまたま出会った殺人狂の変態に殺された』だの、拳句の果てには『昔手酷く振った男が自殺して。その怨念に呪い殺された』という低俗な噂話まであった。

「馬鹿じゃないの。」

僕がそういうと、由美は生薬でも食わされたような酷い苦笑いをして

「ちょっと酷いよね。」

と、そう言った。そして六日後。つまり昨晚に、とうとう婦女連続殺人事件の犯人が逮捕されたらしい……。

*

「由美、僕は納得いかない」

自分の席につくなり理詰めの友人はそう言った。私の真後ろの窓際最後尾に座っている彼をチラリと見やると、彼はむすっとした表情を浮かべて外を眺めていた。私はわざとらしく大きくため息をついて、やりかけの課題をしまい、椅子を180度回転させて彼に向き合った。

「何が？」

「……昨夜の逮捕だよ。」

彼はますますむすっとして搾り出すようにそう言った。

「逮捕って、あの連続殺人事件の？」

「当たり前だろ。ほかにあるか!？」

面倒くさい男だ。

「あのね。容疑者として拘留されたんじゃないかって逮捕なんだよ？ 疑いようがないじゃん。それに犯人だって認めてるっていうし、そもそも自首してきたんでしょ。」

少なくともニュースではそういつていたはずである。犯人が逮捕されて、犯人がそれを認めているのどこをどうやって疑うというんだ。しかし、どうやらそれでも彼は納得してないらしい。さっと腕組みをすると、はき捨てるように続けた。

「いいか。犯人は逮捕されたし、本人も認めてるらしいけど。動機についてはサッパリ口に出さないそうじゃないか。これはどう考えたっておかしいだろ。なぜ自首しておいて殺しの理由を語らないんだよ。」

確かに妙なこともかもしれない。自首したということは良心の呵責やら心変わりやらをしたということだろう。

つまり、自首をしたという時点で『犯人は罪を認めて、罰を受けるために出頭した』と考えられるはずだ。なら動機を語らないというのはどこか矛盾しているだろう。しかし……。

「恥ずかしかったんじゃないの？ 痴情のもつれとかだったら言いにくいじゃん」

動機なんて正直どうでもいいことである。犯人が捕まって、本人が認めているんなら問題なんて残っているんだろっか。

「由美さん由美さん。痴情のもつれで三人も殺すかね。よく考えて

みるよ。この事件は連続殺人なんだ。てことは考えられる動機は愉快犯か、怨恨かのどっちかなんだよ。」

彼は手をフラフラと動かして。私の説を否定した。

「いやいや、物取りつてのを忘れてるよ。」

この不況だ。食うに困った失業者が金品目当てで殺人を犯してしまった。といえれば筋は通るだろう。

「それはありえない。」

私としてはなかなか自信のある推理だったのだが、これまたあつさり否定されてしまう。

彼は鞆からキャラメルを一箱取り出すと、キャラメルを一つ私へよこしながら続けた。

「金目当てなら死体を傷つける必要はないでしょ。だから考えられるのは殺人狂の愉快犯か、極上の悪意が籠った怨恨のどっちかなんだ。」

キャラメルを口へ放り込んで、彼は本当につまらなそうに解説した。

「もう!! どうでもいいのよそんなことは! 捜査なんて警察に任せればいずれ真実が明かされるわよ。あんたがいちいち考えてどうなるっていうの!？」

いつの間に私はイライラしていたんだろう。自分でも思いがけないほどの大声が出てしまい。自分で自分の声に驚いた。慌てて周りを

見てみると教室にいた生徒たちが目を丸くしてこちらを見つめている。顔から湯気が出そうだ。

恥ずかしくて縮こまっている私に比べて、彼はどこ吹く風という感じで呑気に答えた。

「いいでしょ。別に考えるだけならタダだよ。」

まったく嫌な男である。私はもらったキャラメルを口へ入れると力いっぱい噛み付けた。

第一話　く始まりく（後書き）

サキユバスの楽園を閲覧してくださった。すべての閣下たちへ後書き

T h a n k y o u r e a d m e !

第二話　く違和感く

捜査会議が一時解散され、自分のデスクに腰を落ち着けると西園寺夏樹は顎をさすり思いをめぐらせた。

黒羽警察署捜査一課に配属されてから早5年。これまでも変わった事件、事故を目の当たりにしてきたが今回の事件ほど気味の悪いものはない。

デスクに散乱している捜査資料の一つを手にとり、ぼんやりと眺めた。

『黒羽市連続婦女殺害事件』

――――星は捕まったし、事件は解決した。なのになんなんだこの違和感は。

本来、刑事である西園寺はこのような大規模な捜査団の一員に組み込まれたとき、上司の命令に忠実に従わなければならない。我を通しては捜査員の足並みはメチャメチャになっってしまうからだ。

そのため西園寺は、喉に魚の小骨が刺さっているようなこの鬱陶しい違和感について周りには一切公言できていないでいる

――――何か決定的な矛盾点でもあれば……。

そんなことを考えながら会議続きで凝った肩を開いた手で揉んでみると、不意に目を通していた資料に影が差した。

「お疲れ様です！西園寺先輩」

はっと振り返るとそこにいたのは西園寺が現在受け持っている新人婦警の秋山楓だった。

まだまだ新品に近い制服に身を包んでいる彼女は相変わらずちんまりとしている。愛嬌のある笑顔と、感情の起伏が激しく何かと駆け回っている姿から、彼女は先輩刑事の間で『ポチ』だの『ミケ』だの渾名されている。

男性警察官からの人気もそこそこあるらしいが、西園寺には彼女の良さがいまいちわからない

「お、ありがとう」

彼女が差し出したマグカップを受け取り、中に注がれているコーヒーに口をつける。

――随分甘いな。

「会議どうでした？やっぱり二階堂で決まりなんでしょうか」

秋山がおずおずとした調子で聞き込んでくる。

二階堂賢治。二日前、黒羽市のはずれにある派出所に出頭してきた一連の犯行の犯人である。四谷産業の社員で、年齢は23歳と若い。つまり西園寺より5歳若いことになる。

マグカップをデスクへ置くと、西園寺は言葉を選ぶように沈黙し続けた

「まあ、精神鑑定の結果が出るまで今後の展開はわからんよ」

溜めた割には曖昧な表現である。

「精神鑑定つて、二階堂は精神異常者だったんですか？私も聴取を見学しましたけどとてもそんな風には・・・」

秋山が西園寺の左隣の自分の席へ腰掛けた。

「『殺しはした。でも動機とその他詳しいことは話せない』これじゃあ疑いたくもなるさ。殺害当時の三人の被害者の私物を持っていたからこそその逮捕だよ。本来なら悪戯扱いで相手にもされないだろうしな」

しかし、逮捕といっても拘留に近い特殊なもので。刑事裁判の目処も今のところたっていない。本人の供述と三人の私物があるからこそ緊急逮捕に踏み切れたのだ。

それも3人の被害者を出してしまった警察を手厳しく風評する記者たちをなんとか黙らせるために行われたゴリ押し逮捕だったため、二階堂が詳しい事情を話すのをただ待っているという馬鹿馬鹿しい膠着状態が二日も続いているのだ

「悪戯つて……。じゃあ二階堂の自首や供述は全部大嘘かもしれないってことですか？」

秋山は目を丸くして愕然としている。

「そうは言わないけどな。お偉い連中はなんとか二階堂を精神異常

者にしたてて、今回のことを無差別の『猟奇連続殺人事件』ということで決着させたいんじゃないか」

加虐趣味の変態が何かをきっかけに歯止めが利かなくなり、次々と弱い女性をその毒牙で犠牲にしていく。

記者受けのよさそうな結末である。

「でも、それは……。いくらなんでも……。」

酷すぎる。と続けたかったのだろうが、場所が署内では大声ではないのだろう。秋山がそれ以上続けることはなかった。

……これ以上ここで二階堂の話をするとうまくさそうだな

集団の意見にあわない個は異分子として処分される。その法則は天下の警察署でも例外ではない。上の意見に反して得はないのだからおとなしく場所を移したほうが良いだろう。

少なくとも未来ある若手の秋山には良くない。

チラリと時計をみやるといつの間にか時刻は20時を迎えようとしていた

「うーん。そうだな……。おい秋山、今夜は暇か？」

「え……？はい。開いております！」

困惑と喜びの入り混じった複雑な感情を抑えきれず子犬婦警は思わ

ず立ち上がった

「そうか。ならこれから一緒に食事でもどうだ。先輩が奢ってやる」

これまで仕事一筋で何かと鈍い西園寺にはこの一言がどういった解釈をなされるかまったく理解できていなかった。彼はあくまで仕事の話がしたかっただけなのだ。しかし、子犬婦警は別である。

今にも崩壊しそうになる顔の綻びと高鳴る胸を押さえ、子犬婦警は元気に尻尾を振った

「はい！お供します！がんばります！」

西園寺夏樹。黒羽警察署捜査一課の敏腕刑事と評価される彼は、秋山楓と同様に署内では婦警からの多大な人気を誇るのだが、それについて本人は知る由もない。

また、秋山婦警が西園寺に抱く尊敬に近い淡い女心も、彼はまったく気づいていなかった・・・。

周りからのさまざまな羨望の視線を背中に浴びながら二人はお堅い捜査一課を後にした。

第三話　　オカマ店長

4月の夜風は未だ肌寒く、薄着で出勤した自分が恨めしかった。

署の前で番をしている警官に挨拶をして街灯の少ない夜道には人氣がなく、どこからともなく虫たちのさざめきが聞こえてきた。

黒羽警察署の周辺には民家が多く、店といった店はあまりない。そのため食事をとるためには徒歩で15分ほどの隣町まで行かなくてはならないのだ

警察署が街中から離れた場所に位置しているというのも変な話だが、もともと黒羽市は遊郭や出会い茶屋で栄えた背景を持っているため、警察という国権のほうが異分子扱いされている。

歓楽街で裏道に入ると風俗店も多く点在しており、夜になると派手な化粧の女たちがきつい香水を纏って幅を利かせている。

ところが西園寺はそのどうやらその歓楽街へ向かっているようだ。

黙々と歩きながら秋山楓は西園寺の横顔をチラと盗み見した。

この後仕事が入っているわけでもないんだから少しくら遠出してもよさそうなもののに。

二人の間に会話は無い。しかし、西園寺は普段から無口なところがあるので、楓はそこまで重苦しい雰囲気を感じ取ってはいなかった。かといって会話がまったくないというのは楓には本意なのである。

「あの先輩。そういえば何を食べに行くんですか？」

ポツリポツリと増えてきた街灯が二人の顔を照らし出す。

「お好み焼き」

街灯の明かりから抜け、二人は再び薄闇に馴染んだ。

「へえ、先輩お好み焼き好きだったんですか？」

街灯の明かりを背中に受けているせいで西園寺の顔には影が差していて、表情は読めない

「いや、行き着けの店があるんだ。その店長だいぶ変わってるんだが、この時期はいつも空いてるからな」

お好み焼き屋がなぜ4月に空くのか楓にはわからなかったが深く聞こうとは思わなかった。

次第にさまざまな店が姿を現し、あたりに活気が見え隠れする。歓楽街の端は飲み屋や定食屋といった飲食店が主だが、中心部へ行けばゲームセンターやカラオケ、ファミレスのような若者受けのいい店がひしめき合う

「ああ、ここだここだ」

西園寺が指差したのはお好み焼きの暖簾を下げた小さな店だった。築30年はたつていそうな木造建築の寂れた店である

「なんか雰囲気ありますねー」

楓は必死に褒め言葉を探したが、結局凝ったお化け屋敷を褒めるような台詞しか出てこない

- - - - - 失言だったかな。

彼が小さなことは気にしない性格だということを知っていてもなお、無意識のうちに慎重な物腰になってしまう。

慎重すぎるのも考え物である。

今回もやはり西園寺は大して気にした様子も見せず引き戸を引く。すると香ばしいお好み焼きの匂いが漂ってきて二人の鼻腔をくすぐり、楓は無意味な心配を一瞬で忘れた

細かいことを気にしない性格はお互い様なのだろう。

暖簾をくぐり中へ入ると、店内は意外にも綺麗に掃除されており隠れた名店のような印象を受けるにも関わらずお客は一組もいない

「あつらー！ なっちゃんじゃないのお。1ヶ月半ぶりねえ」。会いたかったわぁあん」

不意に奥から野太い嬌声が轟いた。と同時にぬうと大入道のような大男が、店内の脇にある小さな暖簾から顔を除かせた。

40代前半ぐらいだろうか、顎には無精ひげを蓄え、顔は驚くほど四角いので大工か漁師のように見える。Ｔシャツの上にピンクのひよこのエプロンを身に着けているようだが、不釣り合いな『可愛さ』

が異様な雰囲気をかもし出していた

楓が驚愕のあまり言葉を失っているのに対して西園寺はというと、慣れているのかさっさと手近のボックス席へ腰を下ろした

「2週間前に来ただろうが。おい秋山！あー、気持ちわかるけどな。とりあえず座れよ」

楓は慌てて西園寺の向かいに腰を落ち着けた。大入道の出没する未知の場所でポツンと置き去りにされるのはまっぴらである。

席についても捉えられた兎のように落ち着かず、西園寺と自分の手の甲を、何度も視線が往復した。

程なくしてお盆にお冷を載せた大入道が小走りで駆け寄ってきた

「お待たせ。ってあらーん？そちらのお嬢さんは初めましてね。お好み焼き屋『エンジェル』で店長やってます。山口剛三よ。よろしく。ママって呼んでくれるとうれしいわ」

浅黒い顔をくしゃりとゆがめて『エンジェル』のママは微笑んだ

しかし、畳み掛けるような自己紹介と大入道の大きな瞳に凝視されて楓はますます縮こまった。近くで見ると更に男臭い風貌もそれを助長させたかもしれない。

それにしてもお好み焼き屋の店長で、”ママ”とはどういうことだ。 ”大将”のが近いだろうに

「は、初めまして。秋山楓といいます。」

複雑な逡巡の末、やっと搾り出せた声は消え入るような小声だった。未だに面食らっているのである

一瞬の沈黙ののち、グラスを置きながらどこか寂しげに大入道が続けた

「ふふ。ついになっちゃんがこんな可愛らしい彼女を連れてくるなんてね。ママは今すごく複雑な気分よ」

「ただの職場の後輩だ馬鹿野郎。秋山。店長のことはオッサンと呼ぶといい」

西園寺はグラスのお冷を一口飲むと、これまた畳み掛けるように言った。

ただの後輩という言葉に少しだけ楓は落ち込んだ。心のどこかで食事に誘われることで恋人気分になっていたのだろう

「そんなこと言うと楓ちゃんが泣いちゃうわよ。彼女に嫌われちゃっても知らないから」

「いやいや、そんなことないですから！違いますから」

心のうちを見透かされたような不安に駆られ、慌てて否定するとママは楓に意味深な流し目をよこして微笑む。

「あらあら、どっちが違うのかしらあー」

はめられた。深い意味なんてなかったのに、顔の火照りを自覚する

と急に恥ずかしくなってきた

もう！止めてくださいよ。そう言つと彼女、もとい彼は愉快そうに笑った

「もうその辺でいいだろう。雑談するために来たんじゃないんだからな」

呆れた様子で西園寺が二人に割つて入る。楓としてはちゃんと否定したかったのだが西園寺にさえぎられてはどうしようもない

「はいはい、なっちゃんはいつもの豚玉でいいわね。楓ちゃんはど
うする？」

「ああ、私もそれでいいです」

ママはニヤニヤして、楓ちゃんには特別油物をサービスして増量させてあげるわ。とからかった。

止めてください！と楓が悲痛の叫びを上げる。

その一連の流れを見て、いい遊び相手にされたな。と西園寺が笑った。

*

それから10分ほど二人がどうでもいい雑談に花を咲かせていると、奥から大入道がボウルを二つ盆にのせてやってきた

「はい、お待たせ。豚玉二つね。なっちゃんが焼くんでしょう？」

「いや、今日はオッサンが焼いてくれ」

意外だった。二人の口ぶりからして西園寺は定期的にここへ来店していると思えていたのだ。もしそうなら好み焼きの焼き方くらい心得ているはずだろう。

ママが呆れたように大げさなジェスチャーをする。まったくだ。と楓は心の底で同意した。

「なっちゃん。楓ちゃんに何か話があつてうちに来たんでしょう？ プロポーズ的な」

油を引きながらママは静かにそういった。

ありえないけれどドキッとす。西園寺の顔を見るが彼に表情の変化はない

「まあ。・・・話はあるけどな。あんたにも関係する話なんだ」

あるのか。楓はさらにドキッとした。しかし好み焼き屋の店長にも関係のある話となると思い当たる節は・・・。当然ない

しかしママの目つきが少しだけ鋭く、何かを見通そうとしているように細くなった。世界に流動性がなくなる。楓は一瞬だけ時が止まったような錯覚を覚えた。

「中谷さやかの話だ」

沈黙の末、口を開いたのは西園寺だった。しかし、相変わらず世界に動きは戻らない。楓はその名前を聞いたことがある。

中谷さやか。連続婦女殺害事件の二人目の犠牲者の名前だ・・・。

なぜここでその名前が出てくるのだろう。ママに、山口剛三はこの事件に関係しているのだろうか。それも調書に記されないような・・・。

ママは大きくため息をつき、困った表情で「またその話なの・・・。」と悲しそうにつぶやいた

暖められた鉄板の熱が、楓の頬を刺激する。

ママがボウルの中のを鉄板の上へ流し込む。すると、途端に止まった世界は動き出した。しかし世界の緊張感は解けない

じゅうという軽快な音が、楓の耳を刺激する。

「なら、ちょうどいいときに来たわ」

「なに？」

予想外な一言が、楓の脳髓を刺激した。

鉄板の上を見つめていた西園寺が顔を上げる

楓も、ママを見ずにはいらなかった。

「あの子について、新しい情報があるの。たいしたことじゃないかもしれないけど。あんたなら糸口にできるかもしれないわ」

野太いが、静かで、落ち着いた声だった。鋭い目つきは相変わらずだったが、それが彼のどんな感情を表しているのかはわからない

一呼吸置いてママはこういった。

「あんなたち『サキユバスの楽園』って知ってる？」

第四話　　学校の噂

「『サキユバスの楽園』？」

黒羽市の歓楽街の中心部に点在するファミレスのひとつで柿崎由美と昼食をとっているときのことだった。

中学からの腐れ縁である彼女と僕は両親が共働きであることと、家が比較的近くに位置していたことから休日になるとこうしてそろって昼食をとりに出かけることが多い。

最初は異性の普段見ない私服姿にドギマギしていた僕だったが、関係が5年目ともなると欲情のよの字も起こらない。

由美はグラタンの焦げを器からこそぎ落としながら続けた

「そうそう。最近女子の間で噂になってる売春専門の出会い系サイトだね。うちの学校の生徒も何人かそこに登録しててヤバイことやってるって話。」

えげつないものだ。ヤバイことというのとどのつまりは援助交際だろう。それでは裏通りのキャバ嬢や風俗嬢と変わらない。

キャバ嬢といえば、連続婦女殺害事件の二人目の被害者である中谷さやかは元キャバ嬢だとニュースでやっていたな。

他の二件と同様に胸を鋭利なもので一突きにされ、殺害された上で体をスタスタに切りつけられていたはずだ。発見場所は・・・確か・・・。

と、どうでもいいことが頭をよぎったが由美の言葉にそのとりとめのない想像は霞のようにかきけされた

「でね、3組の西川さんもそこに登録してたんだってさ。びっくりだよ。おとなしそうな子だったのにな」

西川？確か連続殺人の三人目の被害者は・・・。

「ちよつと聞いている？」

はっと顔を上げると由美がむくれてスプーンを僕の顔の前へ突き出していた。

「ああ、聞いている聞いている。それよりなんで西川さんがそのサイトに登録してたのかわかるんだよ」

由美は怒らせると後を引くタイプだ。僕は慌てて話を戻した

話が戻って満足したのか由美は乗り出していた体を引いて、スプーンを頭の近くで振り得意げに続けた

「それはねえー。うちの学校では『援交三姉妹』って渾名されてる女の子が三人いてね。三人ともそのサイトでお客をとってたんだって。で、誰かが西川を見つけたというわけ」

援交三姉妹とはとんでもない渾名である。的確だからこそ生々しい響きを持つように僕は思った

「『援交三姉妹』って。誰だよその名前つけたの」

「さあ。他にも『北高の三妖怪』とも呼ばれてるよ。他にも登録してる子はあるかもしれないけど三妖怪がぶっちぎりでサイトで人気高いんだってさ」

呆れた。ここまでくるとただの悪口だろう。もちろん妖怪というのは男をたぶらかすという意味でつけたのだろうが、言葉から得る印象は最悪だ

しかし、被害者の西川千鶴が援助交際をしていたというのは初耳だった。学校内の風聞には疎いほうではあるが、まさか隣のクラスの女子生徒がそんなことをしていたとは……。

西川千鶴とは言葉を交わしたこともないけれど、廊下で何度かすれ違っている。見た目の印象ではずいぶんおとなしそうで純粹そうな子に見えたが……。

前方からの鋭い視線に気づく。由美が刺すような眼光でこちらを睨んでいた

「まさかあんだ。三妖怪を買おうとか考えてないでしょうねえ？確かに可愛いらしいけど三人とも表向きでは淑女を演じてるんだから無理よ。無理」

とんでもない誤解である。考え事をしてはいたが、あくまで事件というフィルターを通して考えていたのであって、決して劣情を催していたわけではない。しかし由美からはそんな風に見えていたのだろうか

「あんだ……。親が家を空けることが多いからって。最低ね」

僕が呆れて言葉を失っていると、スプーンの先をかじりながら恨めしそくに由美がはき捨てる

「違うから。三妖怪のあと二人って誰なんだろうな。って考えてただけだよ」

本当は西川のことを考えていたのだが、口からはそんなセリフが出てきてしまった。もちろん残りの二人に興味はある。

結局考えてたんじゃない。と由美はぶつくさいいながら半分解けかったメロンフロートをかき混ぜた。

「一人は剣道部の主将で三年の一条百合先輩。合鍵を使って深夜に剣道場で男と密会してるって噂よ。何をしてるかは言わずもがなね。髪型はショートカットだったと思う。明朗快活で剣道の腕もなかなかのものらしいわ。」

一条百合先輩。何度か全校集会で表彰を受けていたはずだ。

剣道場は今使われていない旧校舎の隣にあるため確かに密会にはもってこいだろう。特別な用事がなければ教師も旧校舎には近づかないはずである

「もう一人は同じく三年の遠藤奈々子先輩。文芸部ね。詳しい密会場所はよく知らないわ。学校で一回すれ違ったことがあったっけ、なんとなくだけど清潔な感じがしたわ。あとこの人は……。ほら先週の連続殺人の犯人の……。海藤だっけ？その人と幼馴染なんだってさ」

二階堂賢治。そういえば二階堂も北高の出身だという噂を耳にしたことがある。

「まあ、一条先輩と遠藤先輩は援交を認めてたらしいわ。『サキユバスの楽園』は完全匿名サイトで、写真や名前は非公開設定になってるらしいから真実は誰にもわからないわ。あくまで噂ね」

話を締めると、由美はかき混ぜていたメロンフロートを一口飲み一呼吸置いた

「認めてるって。下手したら退学だろ。大丈夫なのか？」

妙なところを心配してしまった。しかし不可解であることは事実である

由美はいくらか機嫌が戻ったのかまた得意げに答えた

「一条先輩は結構公言してたわよ。知らなかったのはあんたくらいじゃない？遠藤先輩は曖昧な表現で煙に巻いてたらしいわ。まあ完全匿名掲示板だから本当に彼女たちが援交しているかどうかは実際に登録して、たくさんいる女の子の中から探し出さないといけないわけ。しかも会わないことには確かめられない。証拠がないから先生たちも手が出せないのよ」

なるほどうまくできている。仮に追及されても「冗談です」と一言いってしまえばそれまでだ。しかしまだ納得のいかないところがあるだろう

「登録してる女の子がたくさんいるっていったよな？出会い系サイトってそんなにたくさんの女性が利用するものなのか？」

しかも売春を念頭に置いたサイトなのだ。そんなに多くの女性が登録しているとは思えない

「『サキュバスの楽園』はランキング形式をとっているんだって。で、人気が上がれば上がるほど売春でもらえる金額が増えるらしいよ。一位の女の子と実際にするには50万もかかるって噂もあるわ。それに本当に・・・その・・・するだけじゃなくて、もっとソフトなコースもあるとかないとか。」

つまり、登録した女の子たちは自分のランキングを上げるために密会を重ね最初は遊び気分だった娘たちもいつの間にか本格的にのめりこんでいくということらしい。

対して男たちは顔写真がなくてもランキング上位の女ならそれだけ支持されているということになり、信憑性につながる

泥沼という言葉がうかんだ。ちょっとした火遊びのつもりで手を出した女性たちはいつの間にか超えてはいけな一線を超えてしまうのだ。

悪質なシステムとしか呼べないだろう

しかし、ここにきてこれまでのもやもやを取り除く最善の方法が見つかった。もしこれが成功すればこの連続婦女殺害事件に疑問はなくなるはずである

「会いにいこう」

僕はただ一言そういった。由美は目をきょとんとさせている

「遠藤奈々子先輩に会いにいく」

連続婦女殺害事件の犯人である二階堂賢治。彼が自首したにもかかわらずいつまでも動機について語らないことと殺害後遺体を無闇やたらに傷つけていたのが今回の事件の疑問点なのだ。

二人目の犠牲者の中谷さやか元キャバ嬢で、三人目の西川千鶴は『サキュバスの楽園』で援交をしていたという奇妙な符号も気にはなるが、そんなことはこの際どうでもいい。

幼馴染である彼女に聞いてみれば何かわかるかもしれない。文芸部の部室は図書室の隣に位置していたはずだ。今日は休日だが、文芸部は休日に不定期に集まってこっそりお茶会をしているという噂を由美からいつだったか聞いた覚えがある。

その思いに突き動かされ、僕は困惑した表情を浮かべた噂好きの女友達を従えて店をでた。

三人目の遺体が発見されてから十日後の昼時のことである。

第五話　　登校

閑散とした校舎内に二人の生徒の足音が響く。特別教室棟の階段を登りながら柿崎由美は、私服だし生徒手帳ないけど大丈夫かな。と、そんなことを考えていた。

由美としては休日に登校などしたくなかったが、なんでも理詰めの学友は文芸部部室にいたのであろう遠藤奈々子に会いたいらしい。援交をしているなどという黒い噂の絶えない先輩に会いたいといわれ、由美は若干のイライラを覚えているのだがそれでも彼女が文句一ついわずついてきているのは彼への信頼ゆえである。

文芸部の部室と図書室は、特別教室棟の三階に身を寄せ合うようにひっそりと存在している。特別教室棟へは一般教室棟から渡り廊下を抜け、さらにそこから三階まで上らなくてはいけない。

あまりに交通の便が悪いので図書室の利用者は壊滅的。その機能も半ば停止している。由美自身、図書室を利用することは滅多にない。噂が本当なら遠藤奈々子は休日になると件の図書室の隣にある文芸部部室でお茶会を催しているはずだ。

由美に援助交際のする者の気持ちは到底わからない。未知なる者との遭遇に彼女は一抹の不安を覚えている。

観察者が五感で認識して初めて、対象物はその正体をあらわすのだ。西川千鶴とは一応会話をいたこともあるから西川は間違いなく人間だった。一条百合とは会話こそしてないが、一応視覚で認識している。全校生徒の前で表彰状を受け取る彼女の背中姿が脳裏をよぎった。

では、遠藤奈々子はもうどうだろう。

私は、彼女のさまざまな噂を聞いた。しかしそれはあくまで人づての風聞である。もしかしたら学校か通学路ですれ違ったりしているのかもしれないが認識はできていない。

彼女は本当に人間・・・か？

「あ・・・。」

三階への踊り場で、半歩前を歩いていた理詰め of 学友が不意に立ち止まる。由美も自然と彼の視線を辿った。

北高の校舎の階段は外界に面する壁が一面ガラスでできている。窓ではないので換気などはできないが、生徒が階段周りで悪さをしていてもすぐにわかるように。と、学校側がわざわざそんなつくりにしたらしい。

外から丸見えなら当然中からも外が見えるわけで、彼はどうやら外にある何かを見ているようだ。

ガラス壁の向かいには旧校舎である。旧校舎は一階建ての木造建築だからからうじてここからも空が見える。そして旧校舎の隣には・・・。

「剣道・・・場・・・。」

休日の昼中だが、そこからは断続的に威勢のいい掛け声と竹刀のたたき合う音が響いてくる。三妖怪の一条百合も、きつと練習してい

るのだろうか。

清く正しい武道の場である剣道場も、今の彼らには淫猥な影がさして見えた。一条百合は本当にあの剣道場で夜な夜な逢引を繰り返しているのだろうか。

「行こう。」

振り返ると彼がいつの間にか三階へ至ろうとしていた。由美も慌ててその背中を追う。

階段を小走りで駆け上がる。文芸部部室は目前である。なぜそう思ったのかはわからないが、どこか遠くでパトカーのサイレンの音が鳴り響いているような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2123q/>

サキュバスの楽園

2011年1月19日01時24分発行